



Title	臨床哲学へ至る道標
Author(s)	日高, 悠登
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 5-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 1 臨床哲学の今——在学院生・修了生によるエッセイ

臨床哲学へ至る道標

日高 悠登

ある日、押し入れにしまっていた古い HDD が気になりパソコンに接続して各フォルダを閲覧したことがある。中に数多くのデジタル写真が詰まっていることが確かめられ、鮮明な思い出が駆け巡り懐かしさが一気に込み上がってきた。古い記録には地元と一時期を過ごしたイギリス、学生時代に撮った京都の神社仏閣の写真が入っており、どれもが感慨深いものであった。当時その地に自分がいたことを再確認した、それと同時に“歩く”ということが無意識の内にはあるが、とても大切にしてきたことに気付かされた。“歩く”には自らの意志も必要であり、心と体が健やかでなければ苦痛が伴うものである。そのことを最も表しているのが、学生時代を過ごしてきた京都での思い出である。三十数年の人生経験しかない私にとって、この街は歩くのに最適であると今でも思う。とりわけ“週末京都観光”と称してデジカメを片手に、様々な場所を訪ねられることは喜びであった。

ある時は、家族連れから観光客、楽器を練習する若者まで誰もが憩いを求めて訪れる、鴨川沿いの見事に咲き乱れる桜の下を抜けた。ある時は、白昼とはガラリと雰囲気が変わり、誰もいなくなった伏見稲荷大社千本鳥居の暗がりの先から誘う、ヒグラシの鳴き声をどこまでも追いかけた。ある時は、南禅寺境内の木漏れ日が照らした落葉を踏みしめながら、琵琶湖から勢よく流れてきた水路閣の水流の冷気を顔に浴びた。ある時は、四条大橋から北に臨む鞍馬山の冠雪を眺めながら、鞍馬天狗達が温かい御汁粉を賭けて雪合戦をしている様子を想像した。そして時には、神護寺から清滝川の溪流に沿って長い時間を掛けながら、ほとんど誰とも遭遇することが無い山道をひたすら下ったこともある。

友人達が京都への進学之机を掴んでおきながら、その多くが京都観光に興味を示さなかったのは残念であった。大学卒業後、この趣味を知っていた友人から京都デートの相談を受け、綿密な計画を立てて送り出したところデートが成功したという報せを受けた。後に友人は、その相手の方と結婚したことから二人にはとても感謝された思い出もある。今振り返れば、“週末京都観光”は京都で青春を送っている自分へのかけがえのない贈り物であった。だが、こうしていつもどこかを訪れる度に、卒業後は再び同じ景色を見ることができないかもしれないという、言い知れぬ不安もすでに予感していた。

その予感は大学院進学によって現実となった。所属した研究室は女性が圧倒的に多い特殊な環境であり、ハラスメントの温床だったのである。ここでは未だに思い出だけで心を抉られる経験をしてきた。例えば、ゼミ発表中にありえない理由により、女性の先輩から数分間にわたって怒声を浴びせられた。全く意味が分からず、ただ動揺する他なかった。指導

教員はその先輩を注意するどころか、むしろ私の方に問題があるかのように発言した。ハラスメントは多岐にわたった。ある時など讒言により指導教員から“謝罪”を要求される屈辱を受けたこともある。気付いた頃には、私はゼミ以外の用事で研究室に足を運ぶことはすっかりなくなっており、専用の机もパソコンも使う気にはなれず、図書館の一角を自分の居場所として見出した。

それらの行為を受けている私の様子を見て、とても気に掛けてくださった人達がいたことは有り難かったが、標準期間での大学院修了を目指していたこともあり、心身共に影響が出たまま、彼女らの行為を告発すべきかどうかただ悩むだけであった。そうして希望する研究テーマにさえ取り組むことも許されないまま、大学院生活を終えることになった。大学院修了などという喜びは微塵も湧かなかった。徒に、研究室に大切な何かを置き去りにしたように思えてならず、この研究室にかつて所属していた先輩達も、同じ思いをしてきたのではないかという考えが脳裏をよぎった。何の達成感も得られないまま、ひたすらに重い気分と身体で迎えた修了式当日、唯一声をかけてくれた方がおり、その方は柔らかな笑顔と丁寧な口調でご挨拶をくださった。その時の事は、今でもはっきり覚えている。その後、その方と再会を果たし、現在もお世話になっているのはありがたい縁であると強く思う。

そのような経験から私は“歩み”が止まった時期がある。“歩み”も“歩く”と同様に自らの意志が必要であり、心と体が健やかでなければ苦痛が伴う。動くにしても、足取りは重くなっていた。表情さえも硬くなった。達成すべき目標も、望んでいた研究生活も崩れたという意味では、これが大きな挫折であり、大きな喪失であったということは今なお深く実感している。その後、心身が回復するまでに貴重な時間を費やしたことが、今でも大変悔やまれる。

しかし、私はとても諦めが悪く、博士後期課程への進学に対してその諦めの悪さを如何なく発揮した。これが臨床哲学研究室の門を叩くことになった経緯である。入学後、大学院生活の充実を実感したことと言えば、研究発表を経験できたことである。そして、学会で有名な研究者と意見交換を行ない、母校の先生方からも応援いただき新鮮な刺激を受けられて大変感慨深かった。笑顔が戻ったことが自分でも分かった。今まで辛い思いを多くしてきた中でも、ここでは快い思い出になったと言える。親しく接してくださった先生方、先輩方、後輩達にはこの場を借りて感謝を伝えたいと思う。

またここでも“歩み”が止まりそうになる出来事はあったが、それらを差し引いても、以前に比べれば人間的にも環境的にも恵まれていた。どこの研究室でも変わらないことが起きていることが分かっただけでも、一つの発見であったと言える。順調に大学院生活を送って1年が経過したある日、予期せぬ因果に遭遇した。指導教員の研究室にてハラスメントの当事者である女性と偶然遭遇したことから、私は行動を起こすことにした。従来の経験から、私のみではなく研究室の人々に危害が及ぶ可能性があったからである。

今後何かが起きることに備えて、まず私と当事者達との関係を明確にする必要があった。元指導教員に連絡を取り、当事者達が私に対してした行為について説明を行ない、逆

に彼にも説明を求めた。彼は当初、当事者達を庇い否定し続けていたが、ハラスメントの証拠を見せたところ全てを観念して、あまりに遅過ぎる謝罪をしてきた。その謝罪は非公式ながら、アカデミックハラスメントも認めるものであった。この話し合いで次々と明らかとなったのは、他にも同様の被害を受けた人達がいたこと、私の印象を悪くする印象操作を真に受けていたこと等々であった。次々と聞かされたエピソードの中には、前述の当事者も入っていた。それらを聞かされて、最初に隠し通そうとした彼の態度へ殊更に強い怒りが湧き、これまでの辛辣な経験が一気に押し寄せた。今すぐ責任を取れ。その場で主張しても良かったのだが、辛さを伴う大きな怒りを露わにすることほど、精神的に負荷が係ることを私はよく知っている。この怒りは、当時無力であった自身に向けられたような気さえした。

話し合いを終えた後、かつて何度も訪れた鴨川の流れを座って眺めていた。私の後ろを通り過ぎる人々は、過去の自分であり幾度も何かを囁いていたようである。会話を反芻していると虚無感の方が大きくなり、大学院生活が振り出しに戻ったような奇妙な感覚を覚えた。私はまだ、あの当時から抜け出せていなかったのである。川面は陽の光を反射して相変わらず美しく、上流に目を向けると、その流れに乗じて私の過去が灯籠流しのように差し迫って来た。それは私の眼前に達した時、現在という姿に変えて私に追い付いたのかと思えば、やはり過去であることを変えずに下流へ向かった。過去も現在も、そして未来もこの流れは変わらず続いてゆくのであろう。鴨川にも流せない過去があるのだと悟り、関係の明確化を携えて帰阪することとした。その後、例の女性が問題行動を起こしたと私は仄聞せず、本人はいつの間にか研究室から去っていた。

研究の世界は奥が深く広い。分野も世代も国籍も超えて興味関心を惹きつけ、時には社会の在り方さえも変えられる世界である。だが、研究する者同士という個人単位ともなると、そこは人間同士、良くも悪くも人間関係が急に狭くなる。この人間関係こそ研究環境（労働環境）において最も重視される要素であることを痛感してきた。機器、資金、空間という物的要素がいくら満たされていたとしても、そこに関わる人間に問題があれば根こそぎ台無しとなる。当事者達の多くは人間に直接関わる研究分野の研究職に就いているが、かつての行ないを一切無視して、その口で綺麗事を並べて教壇に立っているのかと思うと斯界に対して大きな不安が募った。

学生生活には苦い経験が多かったことは実感している。だが、このような苦い経験を抱えながらも向き合い、再び歩まなければならないのが人生であるらしい。いつまでも後ろを振り返りながら歩めば前の壁にぶつかるか奈落に落ちる危険性に遭う。研究の世界も各種ハラスメントとの戦いであることを強く意識させられた今、内部と外部の両方から変えていく必要性を強く感じた。

最近手に入れた湯呑には「七転八起」という文字とだるまの絵が描かれていたが、これこそが今までの私なのであろう。歩いていた途中で何度も躓かされ、転ばされ、傷を負いながら何度も立ち上がった結果に今がある。過去の自分から贈られた“見えない名誉負傷章”は、

今の自分の心の中に大切にしまっている。ただ、これは誰もが所有しているものではない。だからこそ、同様に苦しむ立場に置かれた人がいるならば、その人へ手を差し伸べられるよう強く望んでいる。転ばされないように立ち回る方法だけではない。転んでも立ち上がる時は、その相手の足にしがみついて離さない方法をいくらでも私が伝授できる。ハラスメントを受けた人が、そのまま命を絶つことがないように、私は全力で支援して防いでいく覚悟である。

古い HDD は思い出を蓄積していただけて、それらを何気なく閲覧していた私に、再び歩んでいくように囁いてくれたような気がした。また、これまで何度も寄り道を重ねなければ、今こうしてお声をかけていただき、筆を執る機会を与えていただくこともなかったと思う。この経験を生かして、今後の研究では、研究環境とハラスメントを題材に臨床哲学研究を行なっていきたいと考えている。

ところで、思い返してみれば在学時、臨床哲学とは何かその正体を明かされないままであった。それもそのはずで、臨床哲学研究には未だ範例が存在しないことにあった。その事実と相俟って、自分で「これが臨床哲学である」と答えられれば、研究として掲げられることも可能である。実際、博士論文でも時間を掛けて臨床哲学を探究し、その答えを出せたものと思う。なお現在では、臨床哲学は一つの研究対象であると同時に、研究目標でもあるのではないかと考えている。これは、自分が研究テーマを臨床哲学と成り得るよう自分の問いとなる目標を育て上げ、その問いとなる目標と共に成長していくことである。それが意味するところは、実はまだ分かっていない。ただ、臨床哲学は研究する者の数だけ存在する。誰しもが臨床哲学を率先して創れる機会にあるということは、この研究分野はまたと無い可能性を秘めている。

ここまで臨床哲学について語る私の専門は、哲学ではなく宗教学である。宗教学はその研究対象が字義通り「宗教」ということもあって、おのずと宗教者あるいは宗教関係者が多い研究分野になる。私の場合は、宗教者でもなく熱心に信仰を持つわけでもない者であり、研究者として学会、研究会に出入りしている。とは言え、自分が宗教学を専門とするということは、宗教に興味があることを公言することの一部言い換えでもある。その宗教学も多様化にあり、中でも東日本大震災に関連したケア研究はさらに活発化した印象がある。私自身も終末期医療においてケアに携わる宗教者を対象として研究を行ってきたが、スピリチュアルケアワーカーでもないという、ある意味で一風変わった立ち位置にある。むしろどちらかと言えば、私は老衰に伴ってケアを受ける者としての可能性が高く、ケアは行なうよりも、ケアを知ることの方が似付かわしいと思う。

さらに宗教学に加えて、私は死生学も専門としている。死生学は字の如く、死と生について研究する学問であり内容も多彩である。臨床哲学、宗教学、死生学という研究分野はお互いに関連していることもあって、“三足”の草鞋を履いてはいるが、まだ脚が足りないような気がしてならない。これからも学問に関して多くの草鞋を履いてしっかり歩けるよう自身に期待を掛けたいと思う。

最後に、少しばかり死について話をしてみたい。2020 年は新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) により世界中で多くの方々が苦しんで亡くなられる「コロナ禍」という忘れられない年であった。その比較ではないが、日本でも自死者が目立つ年であった。一般の人々の自死も報道され、芸能人達も立て続けに自死した報道の両方を受けて、私は非常に痛ましい気持ちになった。

彼らに自ら命を絶つ決心をさせたものは何か。それは第三者からはあくまで報道から想像するしかなく、各々の真意に近付くことすらままならない。自死の後に残されて悲しみに暮れる人々の嘆きが、亡くなった方々の生前を想像させる。死の報せを受けて、時として人々は次のように思うこともある。時間さえ巻き戻すことができれば、あの人を救い出すことができるのではないかと。だが、本当に時間を巻き戻せる方法があったとしても、それを良しとする人間もいれば、結果が変わってしまうことを恐れて反対する人間もいる。そう都合良く時間を操ってしまうことへの戸惑いもまた生じるからである。それでも多大な代償を払って結果を変えられることを望むのもまた人間である。

私は死生学を研究しているにも拘らず、死が何かよく分からないことがある。ただ、これまでの経験からすれば、何らかの喪失が死に等しいと実感してきた。前半部分で述べてきた経験がそれである。しかし、時間を巻き戻すことができたとしても、私は同じ状態を再選択するように思う。なぜであろうか。それは私にもよく分からない。きっと“歩く”には、筋肉痛を伴うのがちょうど良いからであろう。